

## 感性と社会の隘路を拓く——1950年代初頭の吉本隆明

渡辺 和靖

社会科教育講座（思想史）

### YOSIMOTO TAKA AKI —— In the Early Part of the 1950's

Kazuyasu WATANABE

Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 第一章 韻律の問題

1950年に入って、8月ごろから制作が開始された『日時計篇』と題された詩稿集を書き継ぐことが、吉本隆明にとっての主要な創作活動となっていたように見える。<sup>(1)</sup>それは翌1951年末まで継続され、あわせて479篇の作品が残されており、作品数を日数で割ってみると、ほぼ毎日詩一篇が制作された計算となり、それは「日時計」という言葉に込められた吉本自身の決意の現れであったと考えられる。『日時計篇』は結局、一部を除いて公表されないままにおわった。<sup>(2)</sup>

もちろん1950年には2篇ではあるが評論も残されており、吉本が詩の制作と並行して、文芸の原理的な諸問題についての関心も持続させていたことが知られる。またこの時期、未発表ではあるが「箴言Ⅰ」「覚書Ⅰ」と題された断片集が書き継がれており、自らの思索をさらに大きく展開させるための努力もまた重ねられていた。こうした文芸の原理的な探求は、自らの制作する詩作品の根柢を探るという意味合いをつよくもっていた。<sup>(3)</sup>

そうした試みのうちには、1949年に発表された3篇の論稿において、戦中期から大きな影響を受けていた小林秀雄からの脱却を試みてのち、自らの独自の立場を構築しようとする模索が示されているのであり、『マチウ書試論』もまたそのような思索の展開のなかに位置づけられるのである。<sup>(4)</sup>

1947年9月に東京工業大学を卒業した吉本は、町工場を転々としたのち、疲れ切って大学に舞い戻った。1949年3月から1951年3月まで吉本は特別研究生（のちの大学院）として東京工業大学において学究生活をつづけていた。

戦時中には休刊していた東京工業大学文芸部の編集にかかる『大岡山文学』は敗戦の翌年、1946年12月に

復刊された。在学中の吉本はこの復刊に大いにかかわっていたようであり、復刊号に吉本の「異神」ほか3篇の詩が掲載されている。

大学に舞い戻ってきた吉本を、当時『大岡山文学』の編集をしていた奥野健男は研究室に訪ね原稿を依頼した。

このようにして評論「現代詩における感性と秩序——詩人Aへの手紙——」は『大岡山文学』1950年11月号に掲載されることとなった。

この評論は、副題にあるように、ある詩人にたいする私信というスタイルで書かれている。

僕は嘗て貴方ではないBという詩人に現代における現実の構造は批評の構造であり、最早詩の成立する基盤は片鱗も存在していないということを、やや感傷的に批評だけがこの絶望的な暗夜の抉出に僅かに耐えるのだと語ったことがありました。（『吉本隆明全著作集』——以下『全著作集』——第5巻、311頁）

吉本は、その理由として「現代そのものの有っている倫理性は激しく原質化された人間の投影を詩の上に要求せずには居ないからです」と語り、つづけて「所謂戦後世代が詩の上に一種の古典主義の再生をもたらしたとき、現代詩は確かに新しい可能性の前に立ったと言えます」と最近の動向に触れ、しかし「彼等に欠けていたものは感性による批判精神の機能でした」と批判する（311頁）。伝統的な抒情とリズムをうけつぐものは、表面がいかに新しく装われていても、現代詩の新しい次元を切り開くものではないと吉本は言うのである。

これはあきらかに、これより4ヶ月前、『現代詩』1950年7月号に掲載された「安西冬衛論」において論じたところと一致する。

「安西冬衛論」のなかで吉本は、対象の表層を瞬間移動していく安西の詩法を「中世の連歌形式から分化

した日本の短詩型」の影響としてとらえ、「安西冬衛の詩は正しく詩が在るべき最も単純な原型を提示致します」と高く評価しながら、最後において、

時代は変わります。今や無数の観念的亡霊が革命精神の上を暗く彷徨致します。彼らは時代の新しい展開を推進する意欲と能力とを持つものではありません。自らの観念の不定と飢渴の紛失とを実証的制覇の確定の中に移入しようとしてゐるに過ぎない。(『全著作集』第7巻, 52頁)

と「新たな疾風怒濤」の到来を予想し、「だが氏はかかる争覇の上に隔絶して位置します」として安西の歴史的な役割がすでにおわっていることを示唆<sup>(5)</sup>していた。

しかし、復活したシュールリアリストとしての安西冬衛を現代詩の状況の中に位置づけようとする「安西冬衛論」とは異なり、「現代詩における感性と秩序」での吉本の関心は、表題にも示されているように、言葉に表現された詩人の「感性」と詩人をとりまく現代社会の「秩序」との関係にある。

ここで注目されるのは、吉本が現代詩の問題を論ずるにあたって最初に、「現実の危機」についてはしばらくカッコに入れて<sup>(6)</sup>、「詩の韻律の問題」についてとりあげると宣言していることである。吉本は、現実社会の政治的状況について分析することが、詩を論ずる前提としてきわめて重要であることを確認しつつも、詩と現実とを無媒介に直結させことを拒絶し、詩に固有の領域である「韻律の問題」をひとまず固有のものとして論ずるというのである。

吉本はマルクス主義の影響を受け、しだいにマルクス主義に傾斜していきながら、文学作品と現代社会を直結させ単純なイデオロギー分析に終始する、当時のマルクス主義の文芸批評に対する違和感を感じていたように見える。その背景には、戦前期のプロレタリア文学と小林秀雄との「政治と文学」をめぐる激しい論理の闘いの記憶が存していたことができる。

吉本によれば「詩における韻律」は、けっしてたんなる「言語の持つ音韻の連象」ではない。それは「意識状態のアクセントの表象」である。

詩の音韻というのはこの意識状態のアクセントが最もプリミティブに語音に托されて表象された場合に外ならないと思います。そしてわれわれの詩作操作を検討して見ますと、この意識状態アクセントは詩人のその時における感性の判断の表象である筈です。(312頁)

つまり韻律は詩人の感性の現れであると吉本はいうのである。

「音韻」の典型には「肯定韻」と「否定韻」の二つがあると吉本はつづける。

「定型韻」は「肯定韻または従属韻」とでもいべきものである。これに対して「詩人の感性が意識の深部において批判の形をとる場合」、韻律は「否定韻」のかたちをとることになる。

「否定韻」はもはや定型というかたちをとることはできず「錯綜した構造」になるはずである。「詩が感性による批判の機能によって、現実の秩序に対決する限り、詩の韻律は〈音楽〉から決定的に訣別せねばなりません。」(同頁)

逆にいえば、定型韻となる「肯定韻」は現実の秩序にたいする詩人の受容的な感性によって支えられるということになる。つまり現実の秩序に対決する感性は「否定韻」、すなわち定型韻を構成しないような惑乱した韻律を構成するほかはない。

このようにして吉本は、詩の「韻律」と「現実社会の感性の秩序」との関係を明らかにしてゆく。

ここに示された認識は単純な発見のよう見えるが、詩作品と社会秩序を媒介するものとして、吉本にとってきわめて基本的な思想の枠組みとなったものであり、その後さまざまなかたちで彫琢され洗練されていくことになる。

最後に吉本は、詩における音韻と「現実の秩序」との関係基礎づける論理として、次のような心理的分析を付け加えている。

人間のうちには「不完全なものから完全なものへ」という傾向がひとつの「定型」として存在している。そこに「神または絶対者」をもとめる宗教が出現する根拠もある。

詩における音韻というものの発生基盤は、斯様な感性の上昇指向の定型、また斯かる定型を人間精神に強制した現実社会の支配の秩序に存在していたのです。(同頁)

つまり吉本は、詩において定型律が成立してくる根拠として、人間のうちに秩序を求める心情とこれを支える社会的な構造が対応していることを指摘するのである。<sup>(7)</sup>

否定韻、すなわち非定型の韻律こそが与えられた秩序に対決する詩人の感性の表現である——このような洞察は、吉本自身の制作する詩作品へと還元されていく。『転位のための十篇』に収められた、1952年に制作されたと推定される「審判」につぎの一節がある。

ぼくたちはすべての審判に〈否〉とこたへるかもしれない  
そうして牢獄の夜が  
どんな難局の晨にかはらうとも  
ぼくたちはそれに関しないと主張するかも知れない  
ぼくたちは支配者からびた一文もうけとらず  
もつばら荒涼や戦火を喰べて生きてきたと主張するかもしれない  
(最終連『吉本隆明全詩集』87頁)

文学と現実との関わりを論ずるにあたって、文学の社会的機能という直接的な役割ではなく、文学の韻律あるいは歌う主体の感性の構造という、むしろ間接的なところから議論を始めているのは、吉本が文学の読み方を小林秀雄から学び、その否定を媒介として文学の独自の読み方を模索したことが深く関わっていると考えられる。小林秀雄を否定的に媒介することによ

てマルクス主義へと進んでいったことが、吉本のこうした思弁を裏打ちしたものと考えられる。

少し後のことになるが、『詩学』1955年11月号に掲載された「前世代の詩人たち——壺井・岡本の評論について——」と題する論稿において、吉本は、壺井繁治の「高村光太郎」論に触れて、

それは、高村の詩に戦鬪的韻律をみつけ出し、そこから必然的に戦争詩へはいつていつたという論旨で、現在、岡本潤などが、盗賊よばわりしているわたしの「高村光太郎ノート」に比較してさえ、はるかにくだらない幼稚なものである。(『全著作集』第5巻、41頁)

と指摘している。

吉本の論稿のうちに壺井の名前が登場するのは、これが最初であり、この後、吉本は壺井の戦前期における戦争讃美の詩作品を暴露し、戦前期の詩の韻律が戦後の詩にも通底しているとして、やがて戦争責任論へとその批判の矛先は拡大していくことになるが、それは政治的な意図によって導かれたというよりも、吉本にとって壺井批判の発火点は、その韻律に対する感覚の鈍さがどうにも我慢がならなかったというのが真相ではあるまいかと推測される。

## 第二章 戦時抵抗の詩

1951年3月、吉本は東京工業大学における特別研究生としての2年の課程を終えた。修了論文は「物質の色と構造」であった。1950年末からこの年の初めにかけて、吉本は、実験、分析など、この論文の執筆に没頭していたのであろう。4月、東洋インキ製造に入社、化成部技術課に配属され、葛飾区にある青戸工場の研究室に勤務することとなった。『色材協会誌』8月号には吉本の研究論文「Phenomenon of Bronze in Surface Coatings」が掲載されている。この年の前半にほとんど詩も評論も執筆されていないのは、職務に精励していたためと考えられる。

吉本がふたたび現代詩の現在について取り上げて論じるのは、『大岡山文学』1952年6月号に掲載された「アラゴンへの一視点」においてであった。特別研究生の過程を終了してからすでに1年と3ヶ月が経過していた。

この論稿において吉本が採りあげたのは、当時、戦時抵抗の詩人として話題になっていたフランスの詩人アラゴンであった。このなかで吉本は、日本外交の対米従属と天皇制の復活へという現在の政治状況にたいする懸念を示しつつ、ナチスの支配に抵抗したフランスの詩人アラゴンが、ほとんどすべて「政治的乃至は啓蒙的意図」のもとに盛んに紹介されることについて、それは「正当」であると一応肯定しながらも、「若干の疑義と異点」があると指摘する(『全著作集』第7巻、54頁)。

吉本はまず、現在の日本において、第二次大戦期の

フランスの「殉難者の証人」アラゴンを取り上げる根拠が不明確であると問いかける。

日本の熱烈な紹介者である進歩的な仏文学者文学批評家諸氏は、現在の日本と大戦期におけるフランスとの時間的風土的差異を無視して感性の封建的な秩序のなかで、アラゴンを読者に与えた文化史的意図を自己の現代の現実に対する批判を提示することによって明らかにすべきであると信ずる。(55頁)

つまりアラゴンを日本に紹介するのであれば、それが現代の日本にもたらず意義をあきらかにする必要があると吉本はいうのである。

つづいて吉本は、アラゴンがかかわったヨーロッパにおけるダダイズム運動について叙述したうえで、その社会的基盤は「プチブルジョワジイのエゴイズムの運動に外ならなかった」と結論したうえで(57頁)、吉本は、アラゴンを日本の現実において問題にするとすれば、ヨーロッパと日本とに「ファシズム」の台頭をもたらした1929年における「世界恐慌」を踏まえて、ダダイズムやシュールレアリズムやアナキズムの混合体であった日本の『赤と黒』の詩人たちとの比較においてではないかと提起する。

アラゴンは1930年にソビエト連邦を訪れ「シュールレアリスト」から「コミニスト」へと転じた。しかし、その「眼と発想が少しも轉身していない」と吉本は指摘する。1942年に発表されたアラゴンの『殉難者の証人』は「ドイツ軍によって不法に処刑されたコミニスト達の手記」を編纂したものであるが、ここで吉本は「殉難者」への「尊敬」と「コミニズム」とを区別する必要があると指摘する。

『殉難者の証人』にあらわれているアラゴンの思想を理解するために大変辛いことだが人間の処刑死という異常な事実を知ることによって僕たちが受ける衝撃を文章を構成している思想から切離さなければならない。何故ならば人間の不当な死という強烈な倫理的な事実は現実的な事実であって、それとそれを感じる者との間に思想の介在する余地はないからである。(74頁)

敗戦後の日本におけるアラゴンの紹介が、アラゴンが抵抗詩人でありしかもコミニストであることを賞讃することに集中していることへの吉本の疑念がそこにはある。すなわち、詩を現実の秩序を直結させて理解しようとする傾向への拒否反応がある。

わたしはゆめ忘れまい 畏われた幾世紀もの  
祈禱文にいた フランスの地の花園を  
夕ぐれごとの苦惱を なぞめいた沈黙を  
すぎてゆく路をおしなべて咲くバラたちのことを  
恐怖の翼にのつて進軍する兵士たちや  
狂気じみた自動車や 皮肉な大砲や  
あわれな服装をした避難民や 恐怖の嵐  
それらすべてを拒絶するバラたちのことを (77頁)

このようにアラゴンの「リラと薔薇」を引用したう

えて、吉本は、「同じく「花」を主題とした」作品として、1944年に制作された秋山清のアッツ島日本軍守備隊の全滅を歌った「白い花」を引く。

ツンドラに  
みじかい春がきて  
草が萌え  
ヒメエゾコザクラの花がさき  
その五弁の白に見いつて  
妻や子や  
故郷の思いを  
春はひそめていた  
やがて十倍の敵に突入し  
兵として  
心おきなく戦いつくしたと  
私はかたくそう思う (80~1頁)

吉本は両者を比較したうえで、

当時のフランスの暗い谷間と、それよりもずっと暗く深かった日本の谷間とを対比させることによって、僕たちが学び得るものは殆んど無限である。

と述べ、アラゴンの事跡を日本の現代詩史と対照することによって、多くの示唆をそこから汲み取ることが可能であると指摘する。最後に吉本は「現在横行しているのは、はったりと威勢ばかりよい議論だけだ」とアラゴン紹介の現状を批判する (81頁)。

詩的表現における「抵抗」の問題は、たんにその「表現された内容とその環境だけを感じ受するならば誤解以外の多くを語られまい」と吉本はつづける。

「白い花」における秋山の抵抗の仕方は日本現代詩の抵抗として正しかったのである。アラゴンの詩の読者が訳者たちの日本現代詩の問題に対する無理解に支えられてただ詩的にといいことを僕は指摘しなければならない。また若しヨーロッパと日本との社会史的な落差を無視するならば、ここに掲げた秋山の詩を戦争肯定と曲解したり何処にも抵抗を感じなかったりすることも出来る。(82頁)

吉本には秋山の詩「白い花」にたいする特別の思いがあったにちがいない。吉本にも、また、アッツ島における日本軍の玉砕をうたった詩があったからである。<sup>(9)</sup>そしてそれは決して戦争詩というべきものではないという、自己の確信があったからである。

吉本の意図はあきらかである。日本の現実においては、あからさまなアラゴンの戦争批判よりも、秋山の静かな鎮魂の思いにこそ、「抵抗」の姿勢が示されているということである。そこには、さきの論稿「現代詩における感性と秩序」において吉本が問題にした、詩のリズムと現実の秩序との関係についての考察が着実に踏まえられている。つまり現実の秩序に対する抵抗は詩の韻律においてどのように現れるかという問題意識である。

そして吉本は「要するに僕たちは、はったりや美辞を警戒すればよい」と警告する (同, 84頁)。

アラゴンを称揚することによって、論者はなにを現代の日本に要求しているのか。だいたい日本にはアラゴンのような意味での抵抗詩人など存在していたのか。吉本の疑念はここにある。

吉本は『自著を語る』のなかで、つぎのように語っている。

だからこれに抵抗した政治家が一番偉いんだって話ですよ。そういう人たちの考え方を中心に、戦後の歴史が始まったわけだから当然そういう考え方も定着していくわけです。ただ僕は恨みがましくも、それに納得しないって。何故かって言えば、まあ身近で言えば肉親もそうだけど、僕の兄貴なんか戦死したって、そういうのがあるし、学校で1年上の奴は特攻隊で死んじゃったとかさ。あと大きな話で言えば、第二次大戦で相手国も数に入れば、100万人単位で死んでるわけですよ。それを全然なくしちゃって、つまり何も言わないで、それで戦後の歴史を作ろうなんてのはもってのほかだっていう、根本的な反感があって、ただそういう考えは、結局恨みがましいともとられたし。(78頁)

吉本の疑念には、戦中期に戦争を美化したり鼓舞したりする作品を公表しながら、敗戦後に、そのことを弁解したり粉塗したりする詩人たちに対する苦々しい思いが働いていたことは疑いない。しかも、その詩人たちが戦後の現実を同じような手法によって肯定していたとすれば、それは表現された内容のイデオロギーの問題ではなく、表現する手法の問題ということになるほかはない。

詩人における「批判性」は、その主題や描かれた対象にではなく、「詩の韻律の問題としてあらわれる筈である。」(87頁)と吉本は断言する。

詩は決して武器となり得ないし、そのような倫理的機能の問題にする限り、詩は実践のもつ倫理的な機能に及ばないのである。アラゴンの詩が現実を動かしたというような発言は、現実の何たるかを知らない詩的な政治青年の発言に過ぎないだろう。(87~8頁)

戦死者あるいは殉難者の苦しみや悲しみをイデオロギーによって汚してはならない、これが吉本のせつじつな願いであった。

吉本は、詩作品から詩人の政治的立場だけを抽出し政治的宣伝に利用することを批判するのである。それは詩における抵抗とは何かという根源的な問題を提起するものであった。ここには、さきの「現代詩における感性と秩序」からのモチーフの連続性を認めることができる。

「アラゴンへの一視点」と同じ『大岡山文学』1952年6月号に掲載された「現代への発言 詩」は、断章集である。そこには「アラゴンへの一視点」のモチーフと共通する発言が数多く見られる。たとえば、

現在コミニズムの詩人たちの一部に歌われている一種の〈歌〉は、彼等の所謂ボルシェビズム革命の近きにあるという予感を彼等が感知しているからに外ならない。言わば彼等は〈批

評)の場から〈肯定)の場への転機が近いということ自らに信ぜしめようとする。だがわたしによれば現代の現実に対する彼等の認識が脆弱であることを糊塗するための衣裳としてしか、〈歌)は最早や成立し得ない筈なのである。(『全著作集』第5頁,315頁)

というような断章のうちには、現代のプロレタリア詩人たちが時代の衣裳に惑わされて詩の本質を見誤っているという指摘とともに、「定型韻」は社会的秩序へ依存を反映するものであるという「現代詩における感性と秩序」における問題意識が示されている。

また、

日本の現代詩は(中略)もし伝統として依るべき処を求めるならば新古今集を以て終了した短詩型の伝統的美学に依る外はない。しかも現代詩は正しくこの美学に反逆することによってしか存在の理由をもたない。(316頁)

という断章には「安西冬衛論」の反響がある。さらに、日本の現代詩人は恐らく自らのうちに伝統的美学とそれに対する反逆を抱いて今後も出現するだろう。言いかえれば自らのうちに全詩史を包摂することなしに、日本の現代詩人は存在し得ない。(同頁)

という断章は、日本の詩歌の伝統を踏まえ、そこに表現された韻律を解析し、それを徹底的に覆すような新しい方向性を切り開かなければならないという認識において、後に見る「日本の現代詩史論をどうかくか」に結実するような日本現代詩史の再構築の試みへと繋がっていくことになる。

### 第三章 『転位のための十篇』

同じ『大岡山文学』1952年6月号に、吉本の詩「火の秋の物語」が掲載されている。これは、翌1953年9月に刊行された詩集『転位のための十篇』の冒頭に収められた。「——あるユウラシヤ人に——」という副題がある。おそらくこの時期吉本は「東洋人」とか「アジア人」という言葉あるいは表現を使用する心境にはまだ達していなかったであろう。

ユウジン その未知なひと

いまは秋でくらくもえてゐる風景がある

きみのむねの鼓動がそれをしてゐるであらうとしんずる根拠がある

きみは廢人の眼をしてユウラシヤの文明をよこぎる

きみはいたるところで銃床を土につけてたちどまる

きみは敗れざるかもしれない兵士たちのひとりだ

じつにきみのあしおとは昏いではないか

きみのせおつてゐる風景は過酷ではないか

空をよぎるのは候鳥のたぐひではない

鋪路(ペイヴメント)をあゆむのはにんげんばかりではない

ユウジン きみはソドムの地の最後のひととして

あらゆる風景をみつづけなければならない

そしてゴモラの地の不幸を記録しなければならない

きみの眼がみたものをきみの女にうませねばならない

きみの死がきみに安息をもたらすことはたしかだが

それはくらい告知でわたしを傷つけるであらう

告知はそれをうけとる者のがはからいつも無限の重荷である

この重荷をすてさるために

くろずんだ運河のほとりや

かつこうのわるいビルディングのうら路を

わたしがあゆんでみると仮定せよ

その季節は秋である

くらくもえてゐる風景のなかにきた秋である

わたしは愛のかけらをすらくしてしまつた

それでもやはり左右の足を交互にふんであゆまねばならないか

ユウジン きみはこたえよ

こう廢した土地で悲惨な死をうけとるまへにきみはこたへよ

世界はやがておろかな賭けごとのをはつた賭博場のやうに

焼けただれてしづかになる

きみはおろかであると信じたことのために死ぬであらう

きみの眼はちひさなばらにひつかかつかははく

きみの眼は太陽とそのひかりを拒否しつづける

きみの眼はけつして眠らない

ユウジン これはわたしの火の秋の物語である(『吉本隆明全詩集』60~1頁)

吉本は実際に戦地に赴いたわけではない。しかし、彼の兄は戦死しており、米沢工業高等学校の級友たちのうちにも戦場に散ったものもあった。ここに描かれているのは吉本自身の現在の姿であろうと推測される。

「廢人」「昏い」「ソドム」「ゴモラ」「不幸」「死」「傷つける」「重荷」「くろずんだ」「かつこうのわるい」「うら路」「悲惨な死」「おろかな」「かはく」「拒否」など、否定的な言葉を連ねて秋の日は語られている。「日時計篇」に示されたような、戦争で死んだものたちへの罪の意識が主題となっている。否定性が全面に出ている作品となっている。

これに対して、4ヶ月後の1952年10月の東京工業大学芸文部発行の『斜面』に掲載され、同じく『転位のための十篇』に収録された「一九五二年の五月の悲歌」においては、むしろ未来へ向かって前進しようとする意志が前面に強く押し出されている。

崩れかかつた世界のあつちこちの窓わくから

薄あをい空を視てゐる

円けいの荷重を感じてゐる むすうの

にんげんの眼

信ずることにおいて過剰でありすぎたのか

ほくの眼に訣別がくる

にんげんの秩序と愛への むすうの

訣別がくる

(中略)

訣別はどこにはじまつたのか  
 どこにかたちをあらはしたのか  
 そのとき五月の空は鮮やかに ビルディングのうへで  
 血と蒙塵と湿つた風とを噴きあげ ぼくは  
 みづからに赦さうとした愛の惰性を憎んだ  
 (中略)  
 鉄鎖をたち切らうとする五月よ  
 煤けた花々のさく季節よ  
 美しいことのなかつたぼくたちの時代の言葉で  
 祈祷や呪詛をとなへることをやめよう  
 季節はふたいの風から  
 ちひさな夕星を生んでゐる  
 ぼくのしらないひとたちがアジアのどこかで  
 銃床と星とを繋ぎあはせる  
 あの伝承の地平線で  
 非道の殺戮をばひこらせるな  
 ぼくはそれをかんがへるとき  
 疾走するかげのやうに ひとびとの言葉のなかで語らうとす  
 るのだ  
 (中略)  
 絶望がむかふからかたい気圏をこしらへてくる  
 ぼくのとほい友たちは銃口を擬して  
 時刻をまもつてゐる  
 をはることのない暗澹をぼくはかれらのために憎む  
 未来と過去とを鎖のやうにつないでゐる歴史を憎む  
 重荷がぼくたちの肩から 未来の肩にうつされる  
 鉄鎖のなかにきた五月よ  
 ちがつた方向からしづかな風をよこしてゐる五月よ  
 ぼくは強ひられた路上に ぼくの影があゆむのを知つてゐる  
 (中略)  
 鉄鎖につながれた五月よ  
 おもたい積載量をのせてめぐつてきた地球のうへの季節よ  
 草と蟲と花々のうへに  
 陽が照り 影が転移する  
 ぼくはむすうの訣別をそのうへに流す (同, 79~83頁)

この作品も基本的には、「崩れかかつた」「踏みあらされた」「黒布」「悲しみ」「苦悩」「寂しげな」「鉄鎖」「煤けた」「呪詛」「非道の殺戮」「哀れな」「荒涼」「怯懦」「絶望」「暗澹」「重荷」「鉄鎖」など、否定的な語句によっていどられていたが、後半になるとそれらの否定性のなかから、「ぼくは／みづからに赦さうとした愛の惰性を憎んだ」「美しいことのなかつたぼくたちの時代の言葉で／祈祷や呪詛をとなへることをやめよう」と決意が語られ、最後に「ぼくはむすうの訣別をそのうへに流す」と過去からの訣別が決然と宣言される。封印されていた「アジア」という言葉が使用されているのもあらたな出発を象徴している。「アジア」の語は、それ以前の「日時計篇」や『固有時との対話』には一つも見られないが、『転移のための十篇』の諸作品のうちに3箇所出現する。

吉本自身「訣別はどこにはじまつたのか」と自問自答しているように、過去からの訣別は突然に吉本の身にやってきたもののように見える。

「フィナンツカピタリズム」という名辞をふくむフレーズを見ると、この訣別にマルクス主義の受容が深くかかわっていたことは疑いあるまい。しかしそれ以上に、否定韻こそが詩における反抗であるという認識が到来したとき、吉本にあらたな出発がやってきたものと考えられる。<sup>(10)</sup>

鮎川信夫はこの「一九五二年の五月の悲歌」を踏まえて、吉本の転換は「おそらくは一九五二年五月のメーデー事件を現実的な機縁として、彼の精神が、ようやく内から外へ動きはじめたためであろう」と推測している。

メーデー事件は、戦後責任を問うべき大きな惨禍をもたらし、今日でもまだ解決していない。彼がそこに眼をとめて、いわゆる民主主義文学者の戦争責任に言及しているのは明らかである。はつきりいえば戦争責任そのものが問題なのではなく、同じような方法上の過ちを、その後も度重ねておかすことが問題なのである。(「吉本隆明論」『吉本隆明詩集』「解説」179~80頁, 1963年1月, 思潮社)

鮎川信夫はまた、別の論稿で、「日時計篇」と立原道造の『萱草に寄す』を比較して両者の共通性を指摘し以下のように論じている。

どういう理由でか、吉本にとって、立原道造の世界は、詩に関するかぎり、(原体験的なもの)と接続している。高村光太郎、宮沢賢治、中原中也等を好んで読んだ時期があつても、その影響となると、言うに足りないほどわずかである。しかし、立原の場合は別で、その受け入れ方は、無自覚といつていいほど素直にみえる。おそらく、立原の観念的抒情性が、ある時期に死に対して彼の抱いていた観念にぴったりだったことに由来するのかもしれない。そこで、彼の(原体験的なもの)と、ごく自然に融け合うような関係があつたのかもしれない。(「鮎川信夫「思想詩人吉本隆明「日時計篇」からの展望」『現代詩手帖』1972年8月臨時増刊号, 16頁)

しかし、四季派的な抒情からの訣別を模索していたこの時期、吉本が立原を参照していたとは思われない。鮎川も最終的には「外見的には共通してみえた両者の抒情的感性には、本質的にかなりの違いがあることがわかる」(同, 17頁)という結論に至っている。

宮城賢は初期詩篇の『呼子と北風』から『残照篇』に至る時期、すなわち「日時計篇」直前の時期には一つの転換があることを指摘して

『呼子と北風』から『残照篇』にいたる初期作品の前期において、詩形へほとんど幸福な信頼があることに人は気づくであろう。この詩形への幸福な信頼が、後期つまり『日時計篇』のとくに(上)の部分において揺れ動きさまが看取されるのである。すなわち、かつて忠実に守られた〈行分け〉の詩形に代って、〈散文詩〉的形態をもつ作品群が、ある意志または衝動からのように続々と生れるのである。この形式上の変

化への意志は、たぶん、ある意味での自己変革への意志ともみえる。（『固有時との対話』研究一つのアプローチ』『現代詩手帖』1972年8月, 54頁）

戦後の現実を受け入れられないザラザラとした自らの感覚。この乖離の感覚こそ、自らの出発の拠点ではないのか——吉本はそのようなところに到達したである。

#### 第四章 もっともマルクス主義に近づいた日

1953年における、吉本にとって最も重要な出来事は、3月、東洋インキ製造青戸工場の組合長に選任され、賃上げのためのストライキ闘争を提起したことであった。

5月30日付で組合員に出された「労働組合長布告」と題する就任挨拶の情宣ビラのなかで、吉本は、ボーナスにかんする会社側との交渉についてつぎのように報告している。

会社側の今回の回答と我々の要求との距たりは、単に金額の差額にあるのではなくそこには薄暗い感傷的な雇用概念と明るい理性的な労働概念とのぬき差しならない距たりが横たわっています。（『全著作集』第13巻, 411～2頁）

吉本は、会社側との交渉のなかで明らかなにったボーナスの「金額の差額」のうちに、会社側の「感傷的な雇用概念」と組合側の「明るい理性的な労働概念」の思想的な対立が横たわっていることを指摘している。

つづいて8月、吉本は組合の発行する『青戸ニュース』第8号においてつぎのように述べる。

「東洋インキの特殊性」などという言葉が組合員の間ですら公言された事があったが、申すまでもなくその様なものは存在しないのであり、単に「東洋インキの後進性」と云う事を弁解がましく言い換えたものに過ぎない。（同, 412～3頁）

吉本は「後進性」を「封建的」とも言い換えている。ここには日本あるいはアジアの特殊性を封建性として発展段階のうちに位置づけるマルクス主義の基本的な歴史観が参照されている。

われわれが生活環境と、労働環境からくる苦痛や絶望感を体で実感するとき、少くともそれは広い視野と展望を把みとる機会に立たされてあるとすることが出来る。われわれはその機会を、諦め、感傷逃避の連続によって失ひ、「東洋インキの後進性」の中で卑屈な居睡りをすべきではない。（413頁）

「東洋インキの特殊性」などという、経営側ばかりでなく組合員のなかにも口にする言葉が、じつは「封建的」あるいは「後進性」の別名にほかならないと吉本は指摘する。それは現実の劣悪な労働条件を隠蔽しようとする会社側の口実にすぎないと吉本は訴える。

敗戦前後の時期、宮澤賢治の「アジア」あるいは「東洋」という概念に今後の日本の行くべき道を構想していた吉本である。しかし、ここで吉本は、それが日本の「封建性」であり「後進性」であることを明確に認

識したのである。

おそらく、この時期、吉本はもっともマルクス主義に近づいた。

10月から12月にかけて、吉本の率いる青戸工場労組はストライキをもって賃上げほかの要求闘争を貫徹しようと試みるが、ストライキ権の確立に失敗し、孤立し闘争は敗北する。吉本執行部は総辞職に追い込まれる。

吉本は翌1954年1月発行の『青戸ニュース』第10号においてつぎのように報告している。

賃上要求が組合員の皆さんの納得がゆくまで押すことが出来ないままで、われわれは辞任してしまったことをお詫びしなければならぬ。こんどの闘争は、われわれの生活を守る闘いであったと同時に「息のつまるほど有難い」会社の家族主義的なまざんとわれわれ労働者の独立心とか自主性とかの闘いでもあった。（同, 414頁）

宣伝、煽動のためのビラではあるが、こうした表現のうちに、吉本が、「家族主義」という日本の伝統的な経営スタイルのうちに、日本の「封建的な労働環境」を透視するという、マルクス主義の理論を学ぶという方向性を見出すことができるだろう。

しかし、同時に吉本は、この闘争をつうじて、マルクス主義の組織論のうちに組み込まれた党派性というものに直面することになる。

この情宣ビラの末尾の部分で、吉本は日本共産党の動きを批判している。

われ／＼が、スト決議に破れて辞任した翌々日、日本共産党青戸細胞はビラを配布した。皆さんのなかには、それを見た人がいるだろう。われ／＼もそれを見た。そのビラに書かれてあることは、大道において正しく、且つ労働者を守ろうとする熱気にあふれたものであった。皆さんもそう思うだろう。しかしその中で、われわれ前執行部が「ストだけが闘争の全てだと思った」とか「一部をみて全体をみない」と書かれてあったが、それは誤りである。

青戸細胞諸君は、すくなくとも、一中産企業労働組合の闘争を批判しようと思うならば、単に表面的な洞察によるのではなく、雇用関係の内部構造と段階がどこにあるかという点まで追求した上で、批判する熱意が必要であろう。だが何れにせよ、われ／＼の組合が、友誼団体と結びついたり、外部から絶えず批判をうけたりすることは良いことである。（414～5頁）

吉本にとって、マルクス主義を受け入れても、上部組織の指令のままに活動する日本共産党の細胞たちの、組合の統一的な活動を阻害するような動きには、許容しがたいものを感じざるをえなかったのであろう。マルクス主義の組織論のうちに深く組み込まれた党派性の理論は、吉本にはどうしても受け入れがたいものであった。

ただこの段階では「外部から絶えず批判をうけたりすることは良いことである」と述べているように、日

本共産党の指導を拒絶するような態度はない。

## 第五章 マルクス主義への疑念

おそらく、1953年3月から年末にかけての労働組合長としての体験をとおして、吉本はマルクス主義の理論と深くかかわることになった。しかし同時に吉本は労働運動における共産党の関わり方への疑念も同時に実感することとなった。それが誘因となったのであろうか、吉本は『近代文学』1954年1月号に「ルカーチ『実存主義かマルクス主義か』」を掲載する。

現代のマルクス主義にとって「人間の実存を存在形式または存在規定とする立場から、現代のコミュニズムのもっている課題へつき抜ける道があるか」という問題について解決を与えることが最も重要な課題であると吉本は述べる。ルカーチはこの課題を「思想と現実の問題、自由と決定論の問題という形で集約的に提出している」（『全著作集』第5巻、534頁）。

もともとルカーチ自身は、「階級意識」という概念を媒介することによって、マルクス主義の客観主義的な硬直を修正しようとした思想家である。しかし、やがてルカーチは共産党を支持する立場へと移行する。そして、ここではマルクス主義を実存主義の観点から再構築しようとするサルトルの試みを批判する。

サルトルは主著『存在と無』のなかで「われわれの実存は選択する自由そのものなのである」と規定し、人間の实存を歴史的枠組みから救い出そうとする。ルカーチはそれを「サルトルの自由は、歴史性からも、倫理的な序列からも切りはなされた、わがままな、統御できない、幽霊であり、それ自体が無意味である」と批判する。

ルカーチは、サルトルの規定に代えてつぎのような解答を提示する。

具体的な現実（社会）は、たしかに個人の行為、いかえれば自由な撰択から成立している。ただその際に、物質的な条件が具体的な現実を究極において決定するのだ。（535頁）

吉本はルカーチの解答を「折衷的」とであると批判する。「どうして無数の偶然が必然に転化しうるのか」という問題は残るといっているのである（同頁）。

またサルトルは『実存主義はヒューマニズムである』のなかで、

「わたくしは、わたくしの自由と同時に他人の自由も欲せざるを得ない。わたくしは、同様に他人の自由を目的とする時のみ、わたくしの自由を目的とすることができる。」（同頁）

というかたちで、自由な実存と倫理とを結合しようとする。これに対してルカーチは「サルトルの自由の概念の客観化は、形式的に彼の全存在論と矛盾する」と批判する。

さらにルカーチはサルトルの『唯物論と革命』をとりあげ、

サルトルが労働者は労働のなかに自分の自由を発見するとい

う場合、労働とはいったい何をさすのか。階級社会における労働のなかに労働者は決して自分の自由を発見しない。刑罰を発見するだけだ。（537頁）

と批判を加える。

吉本はルカーチの批判は鋭いと評価する。

ルカーチは、マルクス主義における物化の理論を存在論によって深化しようとするサルトルの意図が、社会変革の必然性と一義的に結びつかないということ、サルトルの労働の概念のあいまいさを指摘することによって、認識論的に結論したかったのだ。（同頁）

しかし同時に吉本は、ルカーチの批判は「マルクス主義認識論の可成り重要なつまづきの石をも暗示している」と指摘する。つまりルカーチ自身、マルクス主義における理論と実践の関係について有効な解決策を提示していないというのである。

吉本は結論として、ルカーチは認識された現実と具体的な現実を混同しているとして、つぎのように論じる。

このことは、マルクス主義認識論が、《現実》との折衷論である限りにおいて、絶えず《歴史的必然》を味方に引入れているにもかかわらず、つまづきの石を免れていないことを明らかにする。マルクス主義哲学者として能うかぎりの鋭さをもって、存在論の中核にメスを入れるルカーチの論鋒も《歴史的必然》に甘えて、自らの存在論的根拠を震かんとすることを怠ってきたマルクス主義認識論のひ弱さを幾分かは免れてはいないと思われるのである。（538頁）

吉本は、「歴史的必然」というかたちで、スターリンの主導するコミンテルン（国際共産主義）にすべてをゆだねる、当時の共産主義の組織と理論の弱点を正確に見抜いている。それは、1922（大正11）年に、モスクワに本部を持つコミンテルンの日本支部として結党されて以来の日本共産党の構造的な特徴であった。吉本は自らの労働組合の体験からその本質的な欠陥を実感したものと思われる。

## 第六章 詩史の構想

「日本の現代詩史論をどうかくか」は『新日本文学』1954年3月号に掲載された。吉本はこのあと、9月号に「善意と現実」、10月号に「新風への道」を掲載しており、日本共産党系の文芸雑誌である『新日本文学』に論稿が掲載されたということは、この時期、党の側も吉本の側も、ともにまだ対立関係にあるとは意識していなかったことを示すものである。

論稿はつぎのように始まる。

素直にいつて、ぼくは現代の日本の詩とか詩人とかにそれほど関心をもっていない。けれど、まるでそれと逆だといえるほど、日本の現代詩や現代詩人にたいして、詩史論的な関心をつよくもっている。どういう点についてか。それは、詩意識と現実の社会秩序がふれあうときの、そのふれあい方、またたがいにかかわりあい、うごかしあう方式というようなこ

とを中心とした日本の現代詩の変せんについてである。(『全著作集』第5巻, 317頁)

現代詩そのものに興味はないけれど、「詩意識と現実の社会秩序」の関係に関心をもってしていると吉本はいう。「詩意識」と「現実の社会」が触れ合う場所、それが詩史であると吉本は言う。ここにはこの時期の吉本の基本的なモチーフが示されている。

「日本の現代詩」は「三期」にわけて考えることができる」と吉本は言う。「現在(いま)の日本の詩は、ちょうど第二期から第三期にうつろうとしていると考えられる」。

「第一期」の特徴はプロレタリア詩運動の成立である。

それより少し前、宮澤賢治、高橋新吉、萩原恭次郎などの詩意識のうちに、日本の近代詩にはなかった「新しい要素」がすでに用意されていた。

つづいておこったプロレタリア詩運動は、この時期の、日本の社会秩序からほり出されたプロレタリア大衆の、秩序にたいする反抗、怒号、悲しみ、諦め、を詩のなかにすくいあげ、それを訴えたのである。中野重治、小熊秀雄は、この訴えを方法化することに成功した。(318頁)

「第二期」は戦後のプロレタリア詩と「荒地」グループによって代表される。「荒地」グループは「日本の近代詩史上、はじめて、ほんとうの意味での思想を詩のなかにみちびいた」。

第二期のプロレタリア詩の詩意識は、秩序がそれに加担しているという幻想からさめて、秩序が、しだいにそれを疎外するほうへすすみつつあることに気づいたのである。いま、日本のプロレタリア詩運動は、第二期から、第三期へうつりつつあるということをはっきりと把むことがたいせつである。(320頁)

ここには敗戦直後に日本の反体制勢力がアメリカ占領軍を解放軍と誤認したことへの痛切な吉本の批判が示されている。

「第三期」は、谷川俊太郎、中村稔、山本太郎、大岡信、中江俊夫など「詩意識のなかに、実存的な関心も、社会的な関心も、もたない詩人たちの出現」によって特徴づけられる。

秩序にたいする抵抗と、追撃とを、詩意識の中心においたこの派の主動的な詩人たちは、第三期にはいり、現在の社会状況を反映して、微妙な変化をみせている。(中略) かれらは、再建支配階級から、完全にほり出された現在のプロレタリア階級の、くらい、苦難を予想される生活の現実を、つきつめようとせず、これらの大衆が一面的に反映している安息感、楽天主義に方向をあたえようと試みている。かれらは、そのイデオロギー的な立場にもかかわらず、現在の日本の社会構造をつかみとるだけの総合的な詩意識も、プロレタリア階級が、秩序からうけとっている生活意識を、分析する力も、もっていない。(320～1頁)

吉本が、戦前のプロレタリア詩を「現代詩」の出發

点に置いているのは、「大衆の、秩序にたいする反抗、怒号、悲しみ、諦め」を歌うことそこから始まったと考えているからであり、それこそが現代詩の第一の役割であると考えているからである。しかし同時にそこには、戦後詩を戦前の日本の詩歌の発展と無関係に扱うことはできないという吉本の問題意識が現れていたとすることができる。

つづいて吉本は、こうした日本の近現代詩の流れを、「抒情詩型、意識詩型、民俗詩型という三つの型」に分類して具体的に考察する。

まず抒情詩型の例として谷川俊太郎の詩「四行詩」をとりあげる。

ふと言葉が駆けて行つてしまふ  
樹々や空や太陽から私の孤独が帰つてくる  
人の心に私は棲めない  
私は風景の中へ中へとはにかむ

「四季」派の系列を受け継ぐと見える谷川の「一見古風にみえる詩の発想」が、現代において影響力をもちうるのは、谷川の詩意識をささえる「論理性」であると吉本は指摘する。「現実の秩序」が「重圧」を加えるとき「論理性をうしなつて逃亡するか、あるいは、倫理性をもつにいたるか」、「これら安定型の詩人の今後」が注目されると吉本は今後を占う(322頁)。

「意識詩型の詩」として吉本は関根弘の詩「君はもどつてくる」をとりあげる。

風が吹くと  
部屋が涙をいつばいためる。  
ガラスの子供が  
部屋のお池に集まる。  
セルロイドの風車がまわる。  
夢がなびく。  
レコオドがとまる。  
時計が目を覚ます。  
鋸が鼠をひく。  
鉦が猫をけずる。  
金槌が犬をたたく。  
君は部屋から消え失せる。  
池の下には空があり  
空の下には雨があり  
雨の下には部屋がある。  
部屋のなかに  
部屋から消えた君がいる。

この関根の詩は戦前期の「詩と詩論」系の発想型にぞくしている。「一種のリアリティに達してはいる」が「逃亡、発散」にまで至っておらず、「現実抵抗」するのではなくむしろ現実を忠実になぞっている。関根はどのようにして「プロレタリア詩運動のなかに、シュルレアリズムの方法をみちびき入れようとするのか。」と吉本はその将来を危惧する。(322～3頁)

民俗詩型の例として吉本は、野間宏の「雪はおおう」

を例にとる。

降りつぐ雪よ、銀行屋たちの言い渡した  
軒並の破産宣告のなかを白く暗く降りつぐ雪よ  
お前は製品の単価を値切る発注係よりもなおも無情で狡猾らしい  
材料屋は泣いたぞ 地金まけた太い手をだして みんなとも倒れだと  
おお それにもかかわらず 借金取りどもの足をとめることもせず  
ただ白い色で汚れた何者かの罪業をかくそうとする  
金文字で勝利をかざつた戦争屋どもの罪業をおおおうとする  
(以下略)

野間の詩には「日本の原秩序を、疎外された大衆の側から、方法的につかまえようとする適確な認識」があると吉本は言う。

現代のプロレタリア詩運動は「関根などに代表される詩意識と、野間などに代表される詩意識とに引きさかれた状態にある。」と吉本は結論する(324頁)。

従来の詩史は、藤村、有明、泣菫、白秋という「抒情詩型」を主流とする考え方に慣らされてきたが、これとは別に、植木枝盛、透谷<sup>(1)</sup>、啄木、そしてプロレタリア詩運動という「民俗詩型の詩意識の系列」にむしろ詩の主流があったと吉本は述べる。

これらの民俗詩型の底辺には、明治三十一年、日本の秩序が、マンチェスター型の膨張をしめしつづあったとき書かれた、横山源之助の『日本の下層社会』に活写されている民衆の生活が、おおきく横たわっていたのである。横山の『日本の下層社会』は、日本の近代社会思想上たったひとつの不朽の古典であるが、日本の近代詩史論をものする場合、これは詩の思想的原型となりうる性格をもっている。(325頁)

最後に吉本は、「詩人は、かならず独りの眼で現代の現実社会を、その秩序構造の日本型を、ふかく洞察し、そこから、汲みとらなければなるまい」と指摘して、この論稿を収めている。

現代詩の今後の動向も、本質的には、詩人が、秩序の思想的な原型をもとめ、それを創造してゆく過程のなかに横たわっている。(325頁)

従来の四季派を中心とした「抒情詩型」の詩史に対して、新たな「民俗詩型」を基礎とする独自の日本現代詩史の構想を示すことが吉本のもくろみであったように思われる。しかし、それ以上に、詩作品の具体的な分析をとおして現代詩の状況を説得的に語るというスタイルがはじめて提出されたところにこの論稿のもっとも大きな意義が存しているといえよう。その具体性と説得力がやがて吉本を新たな段階へと導くことになるであろう。

## 註

(1) 芹沢俊介は「『日時計篇』の時期を含めた一九五〇年夏か

- ら五三年夏までの三年間を、吉本隆明が詩人としての吉本隆明に全重量をかけていた時期であった、そう特定してみたい」と述べている。(『吉本隆明全詩集』を読む(上)君は風景を抱けたか。』『図書新聞』2003年9月6日)
- (2) 「日時計篇」が『固有時との対話』や『転位のための十篇』へと熟成されていったことについては、鮎川信夫の「思想詩人吉本隆明「日時計篇」からの展望」(『現代詩手帖』1972年8月臨時増刊号)に詳しく考察されている。
- (3) 栗津則雄は「吉本隆明」(『現代の偶像』朝日新聞社)で、『固有時との対話』が「それに直接先立つ詩群よりもむしろ、それ以前から書き続けていた覚書のスタイルに酷似しているのは、注意していい点だろう。」「これらの言葉は、『固有時との対話』の正確な注釈ともなしうる」と指摘しており、「箴言Ⅰ」や「覚書Ⅰ」がその後の評論よりも『固有時との対話』に接続するものとしている。(→『現代詩手帖』1972年8月,125頁)
- (4) 1954年12月に『現代評論』に発表された「反逆の倫理Ⅱ—マチウ書試論」がひそかに小林秀雄批判を意図したものであったことについては、拙稿「小林秀雄批判としての「マチウ書試論」——吉本隆明の一九五〇年代」(『哲学と教育』2010年3月)を参照されたい。
- (5) このことからすると、吉本が冒頭で言及しているBという詩人はあるいは安西冬衛を示唆したものかもしれない。
- (6) 吉本は朝鮮戦争についてハーバート・リイドの言葉を引いて「大陸において協定破棄を口実にして民主諸国家の支持の下に朝鮮に侵入した」と時代状況について述べているが、それをそのまま詩の分析に適用することはない。
- (7) ここには、この時期、吉本が、宗教とりわけキリスト教に深い関心をしめしていたことともかかわっている。やがてそれは『マチウ書試論』において結実することになる。
- (8) この背景としては、日米講和条約、日米安保条約の締結、朝鮮戦争の勃発にともなう再軍備への動き、そして逆コースと呼ばれる思想の動向などがあると考えられる。この時期の吉本と時代との関わりについては瀬尾育生「存在交換と絶対言語 一九六〇年代までの吉本隆明」(『現代思想』2008年8月臨時増刊号)がすぐれた分析を行っているので参照されたい。
- (9) この作品は1968年10月刊行の『吉本隆明全著作集』第2巻の『呼子と北風』には収められず、2003年7月刊行の『吉本隆明全詩集』においてはじめて活字となった。
- (10) 三浦雅士は「吉本隆明の〈原点〉」(『吉本隆明全詩集』刊行を機に)、『週刊読書人』2003年9月19日)で、従来『固有時との対話』『転位のための十篇』は「実存主義からマルクス主義」への「移行」すなわち詩人から批評家への移行として理解されていたが、今回「日時計篇」を再読して、吉本の詩人としての意義を再確認したと述べている。しかし、おそらく、吉本は詩人と批評家の間を往復しながらそれをフィードバックし、詩の根拠を訊ね韻律の意味を探りつつ詩を制作していたのである。
- (11) 『吉本隆明全著作集』第15巻に「(推定1957)」として収録されている断片「北村透谷小論」は、おそらく、この時期に独自の新たな日本近代詩史を構想するなかで制作されたものと考えられる。主語表記が「はく」となっており、この論稿が1954年1月から10月ころまでに執筆されたものと推定される。

(2010年9月10日受理)